

乳がん高度検診・治療センター NEW-す NO.48

2018.5

意外と知られていない男性乳腺疾患 ～女性化乳房症と男性乳がん～

乳がんやその他の乳腺疾患は女性だけのものと思われがちですが男性にも乳腺疾患があります。女性化乳房症は比較的頻度の高い疾患ですし、男性もまれには違いありませんが乳がんに罹ることがあります。今回はこの女性化乳房症と男性乳がんについて解説します。

女性化乳房症

片側または両側の乳房が大きくなってしこりとして自覚し、しばしば痛みを伴います。成因別に、思春期や高齢者で一時的にみられるもの、ホルモンに関係した何らかの異常が潜んでいるもの（非常にまれです）、高血圧や心臓病で常用している薬の副作用として起こっているもの、などに分類されます。またそうした要因が特定できない特発性女性化乳房症も少なくありません。中高年の患者さんでは乳がんを否定するための諸検査が必要となりますが、検査内容は女性の場合と何ら異なりません。

男性乳がんが確実に否定できれば放置して差し支えありませんし、適切な治療薬もありません。自然に小さくなることも期待できます。若年者で美容上の理由で手術を望む場合のみが手術の対象となります。

男性乳がん

男性にもきわめてまれに乳がんが発生することがあります。ただ当然のことながら女性の乳がん比べると桁違いに少なく、男女合わせた全乳がん患者さんのうち1%以下の頻度です（日本乳癌学会の2015年度全国乳がん患者登録調査では0.6%）。女性の乳がん比べて男性乳がんでは、高齢者にピークがあること、約15～20%と高率に乳がんの家族歴があること、などが特徴です。症状は乳頭直下やその近傍のしこりで、しばしば表面皮膚の変化や、異常乳頭分泌を伴います。診断方法は女性の場合と全く同じで、視触診・マンモグラフィ・エコー検査などがなされ、診断確定の目的で細胞診や組織診がなされます。男性乳がんのように、頻度の少ないがん（希少がんと呼びます）では治療法の選択に困ることが多いのですが、その治療は基本的に女性乳がんと同じでよいとの合意が得られています。男性乳がんはその発生部位が乳頭あるいはその近傍であることから手術としては乳房切除術がなされ、脇の下のリンパ節に対してはセンチネルリンパ節生検か、全部摘み取るリンパ節郭清がなされます。ホルモン受容体陽性乳がんのことが多く、その場合は手術後にタモキシフェン（商品名ノルバデックス）の5年投与が勧められます。サブタイプ（乳がん高度検診・治療センターNEW-す No.24参照）によっては抗がん剤治療やトラスツズマブ（商品名ハーセプチン）を投与することもあります。男性乳がんの治療成績は女性乳がんとは大差ありません。



KAZUKA

市立貝塚病院

乳腺外科 稲治 英生

TEL : 072-422-5865